令和5年度　第57回　中学生の「税についての作文」

『幸せを願って』

町田市立南成瀬中学校　3学年　森脇　胡桃

私には、従弟がいる。一つ下の男の子で私たちは幼いときからとても仲が良い。税とは何だろうか？私に税を教えてくれたのは、他に誰でもない、従弟だった。私たちは、家族ぐるみの仲で、夏によく一緒に旅行に行ったりもした。彼の笑顔は、いつも私の心を明るさで満たしてくれた。私は、従弟との睦まじい関係がずっと続くと思っていた。

しかし、現実は違った。従弟が小学三年生のとき、彼の父親が他界し、彼は心を閉ざしてしまったのだ。彼が笑顔を見せることはなくなり、とっても大好きだった学校にも行かなくなってしまった。話す機会もなく、私は彼が塞いでいるのを傍観することしかできなかった。

そんな、彼の心を開き、私たちの関係を元に戻してくれたのが「税金」だった。シングルマザーとなり、母子家庭となった従弟の家は、国からの援助を受けることが出来た。所得税や住民税の減免、児童手当や遺族年金などを受け、従弟は並の生活を取り戻し、心にも小さな余裕を取り戻した。私は、母から聞き、従弟の家が受けている援助が、「税」により成り立っているものだということを知った。今まで、消費税などの税に対し、「無駄」と感じていた私だったが、従弟の笑顔を再び見ることが出来たとき、誰かの幸せを取り戻すために使われる「税」なら、喜んで払いたいと思うようになった。

また、母親から税について教わった様子の従弟が発した「ぜいきんってスゴイねぇ。僕今幸せだもん。」という言葉を私は忘れることができない。一人一人の税金が誰かの幸せに繋る。このことは、私の将来の夢の要望を明確にした。私の将来の夢は警察官だが、どのような警察官になりたいのかははっきりとしていなかった。しかし、従弟の言葉を聞いてからは明確なビジョンを持ち続けている。警察官の俸給は、国民からのお金＝税金で賄われる。私は税を払うことに不満をもたれないよう、人々の信頼や期待に応えるために働き、多くの人の「日常の幸せ」を守れるような警察官になりたい。私は、公務員がお給料を貰えるのが当たり前だと思わず、人々の援助（納税）がなくても、一人一人の笑顔のために行動できる、そんな警察官になりたい。

これからの人生の中で、私は様々な「税」に出会うと思う。しかし、従弟の言葉を胸に一つ一つの税が、それぞれ誰のために、何のためにあるのかを主体的に学び、理解した上で納めたいと思う。私の納める税が、誰かの幸せに繋がりますように。